

## 『宇治拾遺物語』「雀報恩事」考

——韓国昔話との比較をめぐって——

金 恩 愛

はじめに

『宇治拾遺物語』（以下、「宇治拾遺」と略す）第四八話「雀報恩事」<sup>①</sup>のような「隣の爺」型に属する「腰折れ雀」の類話は、東北地方から九州地方に及ぶ日本各地に伝承されている。また、この話型を持つ昔話は日本だけではなく、中国やモンゴル、韓国など、アジア諸国に広く類話が存在する。韓国の場合は、十七世紀から十八世紀にかけて行われた民衆思想運動が口承説話の文献化を推し進める一方、小説化も盛んに行われたその流れの中で、口から口へと伝承された作者・年代未詳の昔話「ホンブとノルブ」が、朝鮮（一三九二年～一九一〇年）後期になって、「ノルブ傳」「燕の脚」「朴興甫傳」「興甫傳」などバンソリ系小説として発表されることになる。今や「ホンブとノルブ」は韓国では、最も有名な昔話となり、教科

書にも載せられている。鄭忠権によると、『興夫伝』は、小学校教科書の場合、一九三五年『普通学校朝鮮語及漢文讀本』をはじめとして現在に至るまで続けて載せられており、二〇〇一年を基準としていえば、四年生の春学期に要約本が載せられ、高等学校教科書の場合は、十八種の文学教科書のうち、十二種の教科書に『興夫伝』が載せられている<sup>⑤</sup>。

その『興夫伝』は、日本各地に分布している「腰折れ雀」の話型のひとつと内容・構成上からみても類似している。それでは、そのような類話の根源とは何か。また、その類話の内容・構成はどのような変化しているか、などに私は深い興味を持っている。そこで、このような問題を明らかにする前に、口承の昔話と書承の『宇治拾遺』の説話を直接比較する研究が今まで見られなかったことに注目したい。私はここで、比較を通じて、両話の重なりと異なりを明ら

かにし、社会的な背景をさぐるとともに、各話の特徴にみる民族間の表現の持つ意味の違いについて考察したい。

一 韓国昔話「ホンブとノルブ」の構成

そこで、昔話の構成について考えるために日本語版「ホンブとノルブ」本文を「主語＋述語」の形で事項を取り出してみると次のようである。<sup>⑥</sup>

蛇が燕の巣を襲う。

燕が脚を折る。

ホンブが燕を治療する。

燕が完全に回復する。

燕が九月九日に飛び去る。

燕が三月三日に江南から戻る。

ホンブが喜ぶ。

燕が瓢の種を持つてくる。

ホンブが不審に思う。

ホンブが種を植える。

五個の実が成る。

ホンブが一つ目の瓢を切り、お米が出る。

ホンブが二つ目の瓢を切り、お金が出る。

ホンブが三つ目の瓢を切り、仙女が現われる。

仙女が大きな屋敷を立ててくれる。

ホンブは金持ちになる。

ノルブが噂を聞く。

ノルブが金持ちになったわけを聞く。

ノルブが家に巣を作り、燕を待つ。

燕が巣に飛んで来て子を産む。

ノルブが無理に燕の脚を折る。

ノルブが燕を治療する。

ノルブが燕から種をもらう。

ノルブが種を植える。

ノルブが一つ目の瓢を割ると、化け者が出る。

化け者がノルブを叩く。

ノルブが二つ目の瓢を割ると、借金取りたちが出る。

借金取りたちが金を取って帰る。

ノルブが三つ目の瓢を割ると、臭い汚れた水が出る。

ノルブがホンブの家に逃げ、助けを求める。

ホンブは半分の財産をノルブにあげる。

ノルブは反省する。

兄弟は幸せになる。

これをさらに整理すると、次のような単純な事項群にまとめることができる。

蛇が燕の巣を襲う。

燕が脚を折る。

ホンプが燕を治療する。

燕が完全に回復する。

燕が飛び去る。

燕が瓢の種を持つてくる。

これらの事項は、崔仁鶴編『朝鮮昔話百選』（以下、『百選』と略す）、権赫来編『朝鮮童話集－我が国最初伝来童話集（一九二四年）の翻訳研究』（以下、『童話集』と略す）<sup>⑧</sup>、『金徳順昔話集－中国朝鮮族民間故事集』（以下、『金昔話集』と略す）と比較しても、昔話の展開の基本において大きな相違は見あたらない。

しかし、蛇の数や命の助かった燕の数などは、昔話の特徴上、語り手によって異なる。また、「燕の脚が折れてしまう」ということは、どの事例とも共通するが、怪我の原因について表現は少しずつ違っている。また、燕が飛び去った時期と戻った時期についても、日本語版『百選』と韓国版『童話集』では、九月九日・三月三日と具体的な月日が表されている。『金昔話集』では、その時期は示されていないが、燕からもらった種を収穫した日が、八月十五日の中

秋節であることだけが示されている。中秋節とは、正月とともに韓国の有名な名節で、旧暦の八月十五日のことを言う。日本語版『百選』と韓国版『童話集』は「江南」と、『金昔話集』でも、南にある燕の国である。また、その種から出た実の数について、

①一つ目の瓢から	日本語版『百選』	韓国語版『童話集』	『金昔話集』
②二つ目の瓢から	お米（壺五個の量）	仙薬を持った童子	金・銀
③三つ目の瓢から	山ほどのお金	様々な物	白米
④四つ目の瓢から	大工	宝物、穀物、大工	うす絹、わり絹
⑤五つ目の瓢から	材木		五人の大工
			美人

となっている。

昔話の特徴上、語り手または地域によって語り口の変化も考えられるが、これらの事例の表現に即してみるかぎり、三つの事例とも米や宝物、大工が出てくるなどの点では大きな変化はない。韓国最初の童話集である『朝鮮童話集』を韓国語で翻訳した権赫来編『童話集』中に収録された「ホンプとノルプ」は、日本語版「ホンプとノルプ」と比較すると、「よし、来たー！」「今回こそー！」「よし！やった」または泣くときは「アイコ！ アイコ！」という泣き声を

出すなど、感嘆詞が多く認められる。その他、主人公の心境や感情を表すような所も多く見られる。このようなことから韓国版『童話集』は、日本語版『百選』に比べ、採録された昔話が全体的に小説化されたものに変えられている。

## 二 『宇治拾遺物語』「雀報恩事」の構成

次に日本の説話の事例として『宇治拾遺』「雀報恩事」から同様に事項を取り出すと次のようになる。実際の語り口は繰り返しによって展開するが、表現に即して取り出した具体的な事項群をさらに整理し、抽象化すると隣翁型の基本的形式は次のように示すことができる。

媼が腰折れ雀を助ける。

雀が媼に瓢の種を与える。

媼が瓢の種から白米を得る。

隣の媼が雀を傷つける。

雀が隣の媼に瓢の種を与える。

隣の媼が瓢の種から毒虫を得る。

このように整理できるとすれば、ここでようやく同じ話型を持つ韓国昔話と日本昔話や説話を比較する段階に達することができる。すなわち、『宇治拾遺』の特質は次のように示すことができる。

媼が腰折れ雀を助ける

○子孫が媼を憎み笑う。

○雀が媼に感謝する。

雀が媼に瓢の種を与える。

媼がたくさん瓢を得る。

○子孫が瓢を食べる。

○媼が瓢の中から白米を得る。

瓢の実が熟する。

媼が裕福になる。

隣媼が雀を傷つける。

○雀が隣媼を憎み恨む。

雀が隣媼に瓢の種を与える。

隣媼は味の悪い瓢を得る。

○隣媼が瓢の中から毒虫を得る。

隣媼が命を落とす。

右の事項の中、○印を付けたものに『宇治拾遺』の特質は端的に示されている。それでは次に日・韓の昔話と説話を具体的に比較し考察してみたい。

三 「雀報恩事」と韓国昔話「ホンブとノルブ」との比較

1 「雀報恩事」と「ホンブとノルブ」の構成

この章では、『宇治拾遺』「雀報恩事」と韓国昔話「ホンブとノルブ」との内容を比較してみよう。

「雀報恩事」(日本)		「ホンブとノルブ」(韓国)	
発端		発端	
展開		展開	
結果		結果	
①	子供が投げた石に当たって腰を折った雀を婆が介抱する。	①	ホンブは蛇の襲いから燕を救い折られた脚を介抱する。
②	隣の老婆は自ら石を投げ、当たって飛べない雀を介抱する。	②	ノルブは巢から燕を取り出し、無理に脚を折ってから介抱する。
①	翌年春、雀からもらった一つの種からたくさんの実が出る。	①	翌年春、雀からもらった一つの種から五個の瓢の実が出る。
②	隣の老婆も三つの瓢の種をもらう。(七つ八つ程の瓢の実)もらう。	②	翌年春、(幾つの瓢の種をもらう。
③	白米	③	米、お金、赤・青い魔法の瓶
④	蛇、蜂、ムカデ、トカゲ、蛇など	④	トケビ、借金取りたち、汚れた水で家が沈んでしまう。
①	婆は裕福になる⇨幸せな結末	①	ホンブは裕福になる⇨幸せな結末
②	隣の老婆を刺し殺す。(不幸な結末)	②	ノルブは悪行を反省し、兄弟は幸せになる。⇨幸せな結末

さらに、『宇治拾遺』「雀報恩事」と韓国昔話「ホンブとノルブ」との内容を詳しく比較してみよう。

12.	結果	毒虫などが子供を刺し、老婆を刺し殺す。	弟から助かれ、悪行を反省し、兄弟は幸せになる。
11.	悪役の瓢から出た物	蛇、蜂、ムカデ、トカゲ、蛇など	トケビ(棒で叩く)・借金取り(何もかも持つて行ってしまふ)・汚れた水(家が汚れた水に沈んでしまふ)
10.	悪人への贈り物	十日後、三羽から三粒の種七つ、八つほどの瓢の実	一つの種から幾つの瓢の実
9.	悪役の行動	自ら石を投げ、腰を折った雀を介抱する。(三羽)	巢から燕を取り出し、無理に脚を折って介抱する(二羽)
8.	瓢から出た物	いくら取り出しても量が減らさないお米	米(大きな壺五個と三石ほど)・青い魔法の瓶(建築材料)・青い魔法の瓶(仙女)・赤い魔法の瓶(大工が出る)
7.	贈り物	瓢の種一粒(たくさん瓢の実が出る)	瓢の種一粒(五個の大きな瓢の実)
6.	戻った時期	二十日後	翌年春(三月三日)
5.	飛び去る	怪我して幾月後	九月九日
4.	怪我部位	腰を折られる。	脚を折られる。
3.	怪我原因	子供が投げた石に当たって	蛇の襲いから逃げる時、巢から落ちる。
2.	登場動物	雀	燕
1.	対立関係	六〇才の老婆対隣の老婆	兄対弟
		「雀報恩事」(日本)	「ホンブとノルブ」(韓国)

両者の内容を比較し、最も重要だと考えられる点は次のとおりである。

(一) 主人公の対立関係

日本説話は六〇才の老婆対隣の老婆という隣人の対立関係があるのに対し、韓国昔話は兄弟間の対立関係がある。ただし、日本に分布する昔話の中では、小沢謙一編『おばの昔ばなし』に掲載されている事例は、兄弟間の対立関係をなすもので、脚を折られた燕が登場するなど「ホンブとノルブ」と類似している。<sup>⑨</sup>

(二) 登場動物

日本説話は雀であるが、韓国昔話は燕である。雀は韓国においても一般的な鳥であるが、燕は「三―四月に渡来し、人家付近に巣を作って三―七個の卵を産む」<sup>⑩</sup>とされ、燕と雀は昔から人間と親しい動物である。韓国では、「ツバメを殺すと盲目になつたり火難にあつたりする」という俗信は、こうした保護思想の現れと見られる。さらにはツバメの営巣を家運も勃興する兆しと見、反対にツバメの渡来の途絶をその家が没落する兆しと考えた<sup>⑪</sup>と言う。日本では昔から「白いスズメは来福の兆しと考えられた」<sup>⑫</sup>し、「スズメをとると火事になる、夜盲症になるとする俗信は多く、スズメを保護しようとする思想」があつたとされている。<sup>⑬</sup>日本では「宇治拾遺」「雀報恩事」の類話の中で、『通観』によると、京都府与謝郡伊根町新井

「燕とかばちや種」<sup>⑭</sup>、大島建彦氏によると、広島県世羅郡甲山町の『芸備昔話集』、甲奴郡総領町『備後の昔話』<sup>⑮</sup>に伝わっている類話には燕が登場する。このように日本では地域によって、燕が登場する話もあるが、韓国昔話「ホンブとノルブ」の類話の中では日本のような雀の登場は見当たらない。

(三) 怪我の原因

「雀報恩事」の場合は、「童部石を取りて打ちたれば、当たたり腰をうち折られにけり」と、子供が投げた石に当たって腰を折れるというところであるが、「興夫伝」は、「一匹の蛇が現れて、燕の巣を襲った。燕は片はしから喰い殺されたが、その中のただ一匹の雛燕だけは、危いところを辛うじて逃れることが出来た」と、蛇から逃げる過程に怪我をしている。『通観』によると、『宇治拾遺』「雀報恩事」のような子供が投げた石に当たって腰を折られるという類話は、埼玉県所沢市にも伝わる。その他、静岡県浜松市の「羽折れ雀」には、「屋根から落ちてきた足の折れた雀」<sup>⑯</sup>、勝田郡勝田町の「腰折れ雀」<sup>⑰</sup>、苦田郡上斎原村本村の「腰折れ雀」<sup>⑱</sup>、福岡県甘木市の「足折れ雀」<sup>⑲</sup>には怪我の原因はなく怪我した雀を拾ってから介抱するという類話も伝わっている。『金徳順』の「ホンブとノルブ」<sup>⑳</sup>は、蛇の襲いから逃げる途中、脚を挟んで怪我をするが、高橋亭編「興夫伝」<sup>㉑</sup>には、「巢より零（こぼ）れ落ちて脚を折り」と巢から落ちて怪我

しているという。日本と韓国といずれも各地で、または語り手によって様々な怪我の原因がある。

(四) 怪我の部位

韓国昔話ホンブとノルブは、燕の怪我した部位が脚に決まっているが、日本の場合は各地域によって「腰」になっている類話もある。『集成』<sup>22</sup>に隣の爺型に分類されている「腰折雀」の類話の中、大分県宇佐市、埼玉県所沢市などの類話では、怪我の部位は「腰」であるが、福岡県浮羽郡、広島県佐伯郡、兵庫県津名郡、静岡県浜松市、山形県西置賜郡に分布する類話には、「脚」となっている。

『通観』によると、埼玉県所沢市（巻九）、勝田郡勝田町赤坂（巻十九）、苫田郡上斎原村本村（巻十九）には、怪我部位は「腰」であるが、長岡市西蔵王町（巻一〇）、広島県呉市（巻二〇）、福岡県甘木市福田町（巻二三）には、「足」となっている話が伝わっている。その他、登米郡石越町（巻四）、静岡県浜松市芳川町（巻二三）には、怪我部位が「羽」となっており、美方郡村岡町長坂（巻十六）の話には腰折れた雀と足折れた雀が同時に登場する。

(五) 鳥が飛び去った時期と戻った時期

「雀報恩事」は春という季節に雀が登場し、怪我した雀は「多くの月比日比、暮るればをさめ、明くれば物食はせ習ひて、あはれや飛び去ぬるよ」と、戻った時期については「さて廿日ばかりあり

て」とあるだけで、雀が去った時期と戻った時期は明確には分らない。

それに比べ、「ホンブとノルブ」の場合は、燕が飛び去った時期は九月九日<sup>23</sup>、戻ってきた時期は三月三日と、月日を明らかにしている。それは、登場動物の違いから生じたものであると考えられる。韓国では、三月三日には燕が江南から戻る日として「サンジツナル」という豊年を願う祭りがあり、「九月九日」には「九重」という豊年を感謝する祭りが行われている。このような登場動物の違いから「ホンブとノルブ」の中に「三月三日」「九月九日」という、具体的な時期が示されたのではないかと考えらえる。

ソウルの慶熙大学校民俗学研究所は、文学的研究と現地調査などの調査研究を行い、パンソリ興甫歌の「雀路程記」と「朴打鈴」などに出てくる地名などを根拠として、「興夫伝」の作品背景と舞台が全羅北道南原市であると述べている。<sup>25</sup>それによると、「興夫伝」は引月面城山里と阿英面城里を中心に昔から伝えられてきた説話（朴チヨムジ説話やチユンボ説話）が、パンソリに組み入れたものであり、また、小説「興夫伝」の内容などを根拠として、南原市引月面城山村がホンブとノルブの故郷として、そして、南原市阿英面近所の福德村をホンブが兄であるノルブに追い出され、その後大金持ちになった所であると述べる。現在もこの二つの村では、いつか

ら始まったかは定かではないが、旧暦三月三日になると「朴チヨムジ祭祀」が行っている。現在、韓国の南原市では一九九三年から毎年、旧暦の九月九日に興夫祭という祭りが行われている。

(六) 贈り物としてもらった種

日本・韓国とも種をもらう。韓国の場合は瓢であるが、日本の場合は、「通観」によると、登米郡石越町(巻四)、山梨県西川大門町(十二巻)などに伝わっている類話には瓢箪、埼玉県所沢市(巻九)には瓢の種が出てくるが、与謝郡伊根町(巻九)、美方郡村岡町長坂(巻十六)の類話のようにかばぢゃの種が出てくる場合もある。

(七) 瓢から出た物

「雀報恩事」は、「白米の入りたるなり。思ひかけずあさましと思ひて、大なる物に皆を移したるに、同じやうに入れてあれば」と、いくら移しても同じ量である白米が出てきて裕福になる。一方、隣の人の瓢は、隣近所の人たちとけるを吐いて苦しくなり、他の瓢からは蛇、蜂、むかで、とかげ、蛇が出てきて女を刺し、また、七つ八つの瓢からはたくさんの毒虫などが出てきて子供を刺し食い、女を刺し殺してしまふ。

それに比べて韓国昔話は、瓢からお米以外仙女、大工、トケビ(化け物)など、人が出てくる。特に大工が出て家を建てるというモチーフは、「雀報恩事」や室町時代の御伽草子「雀の夕顔」など

の古い時代のものには見られず、さらに昔話においても他の採録例にまったく見あたらない、きわめて特異で異質なおもむきを感じさせるもの<sup>26)</sup>である。『事典』は、「近年の採集で「腰折れつばめ」が島根・広島県から報告」され、「特に島根の例は(中略)朝鮮の例との類似が目される」という。この島根から採集された類話について邊恩田氏は、「大工の家建てのモチーフが韓国の昔話と類似するという指摘はきわめて重要<sup>27)</sup>」であると述べている。

さらに『事典』は、「大工の家建てのモチーフ」の伝承地、島根県・広島県と、登場動物が雀ではなく韓国のように燕になっている類話の伝承地新潟県・長野県・岐阜県宮越県などを取り上げ、「古代より朝鮮半島と地理的に近く、歴史・文化的に関わりが緊密であった」ことから、「山陰地方から東アジア大陸との昔話の交渉の根の探さが確認されただけでなく、山陰地方から東北地方への伝播も想定される」と論じている。また、鄭忠権氏は瓢から宝物が出てくるモチーフについて、

興夫伝は兄弟間の友愛と朝鮮後期一般平民の富に関する問題を扱っている。この作品で注目すべきところは、朝鮮後期農民達を苦しめた貧窮の問題であろう。朝鮮後期社会変動の最中、土地を失くした農民の数が急増することとなり、それらのほとんどは生存を襲われるほど貧しい限りであった。瓢を割ると宝

物が出るという非現実的な発想は、このような当時の現実的状況と関連つけてみると理解できるもので、このような非現実的要素は農民達が直面する絶対貧窮と、不可能な富への念願に対する逆説的表現で、むしろ強い現実性を表したとも言える。<sup>30)</sup>

という。この指摘から、各『興夫伝』に描かれている内容とモチーフなどが、当時の歴史的、社会的状況が作品の中に現れたものであると考えられる。

## 2 共通点と相違点

「雀報恩事」と「ホンブとノルブ」の大きな共通点は、①家族、または人間関係の葛藤、②動物の報恩、③善人には福、悪人には罰が当たるという勧善懲悪、教訓的な話であると考えられる。ただ、同じ根源を持つ昔話でも、「言語の違い、信仰の違い、習慣の違いなどが昔話の変化をもたらす原因」<sup>31)</sup>となり、また移動経路や社会的環境、語り手など、様々な環境要因によって、話の内容や構成が少しずつ変化していくのではないか。

関敬吾氏は隣の爺型と兄弟間葛藤型の特徴について次のように論じる。

兄弟譚、隣の爺は社会的モチーフが主である。人間の社会生活における相互関係、相互の社会的葛藤がその基本的要素となっている。(中略)隣の爺型は相隣りする二つの家、あるひは

爺と婆との闘争である。善良なるものが勝利を制する物語であり、倫理的教訓的要素を多分にもつ。我が国ではこの型の昔話が特に発達しているやうに思へる。<sup>32)</sup>

『宇治拾遺』の説話においては、③の勧善懲悪、教訓的な問題について小林智昭氏は、「善因善果の信仰が、庶民の心に明るく受けとめられている」、「典型的な悪因悪果の応報譚」<sup>33)</sup>であると述べる。『新編全集』には、「一対の主人公の幸不幸を語るが、二人の人物には善悪といった対象らしきものはなく(中略)勧善懲悪譚の色彩は希薄である。むしろ、一見さりげなく素朴なよそおいの中、二人の老女の孤独と心情のゆれ、幸不幸というものの条理と不条理などを独特な人性批評にもとづいて描くものかと思われる」と言う。つまり、「雀報恩事」と韓国昔話「ホンブとノルブ」の大きな相違点は、①隣の人との葛藤と兄弟との葛藤、②雀と燕という登場動物の違い、③瓢から出たものの違い、④主人公の死対幸せな結末であると考えられる。②について高木敏雄氏は、「宇治大納言がこの話を翻訳する時分に、燕を雀に直して瓢の内容を簡単にしたのだと思われる」<sup>34)</sup>と論じる。あるいは③の瓢から物が出るということについて、善人には福を悪人には罰という結果の変化は変わらないが、日本・韓国の各話の伝承地、または語り手によって瓢から出たものの種類は異なっている。韓国の場合は瓢の種となるが、日本の場合は「腰折

雀」の伝承分布表<sup>36)</sup>によると、各伝承地によって、ひょうたん、すいかなどが見られる。④の結末について「雀報恩事」の場合は反省する機会も与えられず、悪人は罰が当たって殺されてしまうが、「ホンブとノルブ」の場合、悪人であるノルブは悪行を反省し、弟とともに幸せになるというハッピーエンドである。

このように「雀報恩事」は「隣の爺」型で、善人である主人公隣の婆を中心として話が展開されるが、「ホンブとノルブ」は、兄弟という家族間の葛藤の展開である。崔仁鶴氏は、「隣の爺」型が『集成』に十四型が認められるが、韓国には「隣人」型が九型、兄弟間葛藤は十八型も及ぶというところを取り上げる。崔仁鶴氏の整理によって、昔話を取り上げて見ると次のようである。<sup>37)</sup>

日本

韓国

「舌切雀」「腰折雀」

「ホンブとノルブ」

「瘤取爺」「花咲爺」

「兄弟と犬」

「大蔵の亀」「物いう動物」

「真似する石亀」

「地藏浄土」「鼠浄土」

「金の砧銀の砧」

そして崔氏は次のように述べる。

韓国は長い間、長子相続が続けられた。しかし、その背景には大家族制度という家父長制があつて、父親が死ぬまでは隠居も分家もなかった。(中略) あらかじめ遺言などがあつても兄

『宇治拾遺物語』『雀報恩事』考

弟間における財産分配に際しては争いがありうる。一方、日本では隠居や分家制度があつて、財産をめぐる兄弟間の争いは韓国や韓国よりは少なかつたかも知れない。それゆゑ兄弟間の争いを内容にした昔話が、日本の場合には「隣の爺」型に発展したかも知れない。<sup>38)</sup>

一方、小澤俊夫氏は、日本人にとって、「隣への関心」が「人の社会的行動を律する、ひとつの強い規範」だったといふ。<sup>39)</sup> また、稲田浩二氏も「兄弟譚形式の分布地域と隣の爺譚形式のそれぞれが重なっている<sup>40)</sup>」ことを根拠とし、「隣の爺譚は兄弟譚を母体として生まれて構成された他の話型に拡大された<sup>41)</sup>」ものであると論じる。それによると、日本では「兄弟譚から隣の爺譚への転成もなお東アジア伝承圏の中で大陸との交渉を保ちながら行われ、沖縄県ではひきつぎ兄弟譚形式を根強く保ち、西日本各地ではモチーフにそのあとがいちじるしい。これに対し、東日本の隣の爺譚構成は大陸との交渉の絶えたとこれら自由な展開をみせているようである<sup>42)</sup>」と述べ、隣の爺型と兄弟間葛藤型は地域上、伝播過程に生じたものであると論じる。

ところで、『宇治拾遺』の説話について小峯和明氏は、「この話で注目すべきは、老婆と子、孫との関係性であり、それを軸に事件が展開していくことである<sup>43)</sup>」と述べ、隣人との対立関係はか、家族間

の対立・葛藤関係が存在していると論じている。

昔話とは「伝えてきた人々の生活感情の深い部分を、如実に反映するものである」<sup>④</sup>から、その内容には実際、伝承者が生活する社会・文化生活様式や伝承者の意識が反映されたと考えられる。

おわりに

以上、「宇治拾遺」「雀報恩事」と韓国昔話「ホンブとノルブ」の構成と内容の比較を通じて共通点と相違点を述べ、各話の関連性と相互関係について調べてみた。例えば、登場動物の違い、瓢から出たものの違い、死という不幸対幸せな結末などが挙げられる。韓国は昔から長子相続制度と宗家制度がある。財産を長子に継続し、族譜や家系の風習、先祖の祭祀などを行い、家系を守るという意味もあるが、宗家の大きな役割は先祖への祭祀のことで、これは先祖を崇拜する儒教思想とも関連があると考えられる。

その長子相続制度から財産をめぐる兄弟間の争いが推測され、兄弟対立の話が発達した原因の一つではないかと考えられる。また、「ホンブとノルブ」の場合、弟は働きもので、優しい性格であることを強調し、財産を得る過程において偶然な幸運や僥倖より、優しきという日常生活から報じたものであることを示す。これは、積善の家には必ず余慶があるという「積善之家必有余慶」の儒教思想と

の関連も考えられる。韓国の場合「ホンブとノルブ」が文献化された十八世紀頃の朝鮮は儒教を基本思想とし、民間信仰でもあった。当時、両班と平民という厳格な身分社会制度であった農民において、膳をすれば福が訪れるという、瓢から宝物が出てくるモチーフは現実から抜け出そうとする願いが表れたものとも考えられる。これまで述べた二つの日本と韓国の昔話の大きな相違点は瓢から出た物の違いではないか。

瓢から出たものとして韓国は、米以外に仙女、大工、トケビ（化け物）など人が出てくるが、日本の場合は米だけが出てくる。『宇治拾遺』「雀報恩事」が文献化された十三世紀頃、米は食料だけではなく、金銭の代わりとされ、その米の大事さが話の内容に表れたと考えられる。登場人物の対立関係において、日本は、特に隣の人との対立関係に関する話、つまり「隣の爺」型が発達している。それは日本人の隣への高い関心と、人間関係の中、隣との関係が重要であった社会的特徴とつながりがあると考えられる。

このように両国の家族制度と財産の分配などをめぐる社会制度と構造の相違から日本では隣との対立型、韓国は兄弟対立型が発達したと考えられる。つまり、昔話の変化に社会制度、生活様式・土着信仰などが大きな影響を与えていることであろう。

注

- ① 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、二〇〇三年、一三七頁。
- ② 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九八五年、五七七～五七八頁。
- ③ ①に同じ。
- ④ 崔仁鶴著『韓国のイェンナル・イヤギ (옛날이야기) 君島久子編』日本基層文化の探求 日本民間伝承の源流 小学館、一九八九年、一八二頁。
- ⑤ 鄭忠權著『興夫伝研究』図書出版ウオルイン、二〇〇三年、二九六頁。
- ⑥ 事項の概念については廣田收『宇治拾遺物語』表現の研究』（笠間書院、二〇〇三年）による。以下私の「ホンブとノルブ」の分析については、同『宇治拾遺物語』の中の昔話』（新典社、二〇〇九年）に紹介されているものによる。
- ⑦ 崔仁鶴著『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、一九七四年。
- ⑧ 権赫采編『朝鮮童話集—我が国最初伝来童話集（一九二四年）の翻訳研究』セヨン社、二〇〇三年。
- ⑨ 小沢謙一編『おばばの昔ばなし—池田千セの語る百四十話』野島出版、一九六七年、二九二～二九四頁。
- ⑩ 李熙昇編『ハンゲル大辞典』民衆書林、一九八三年。
- ⑪ 下中直也編『世界大百科事典十五』平凡社、一九八八年、三八頁。
- ⑫ ⑪に同じ。
- ⑬ 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観 第九卷 茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川』同朋舎出版、一九八八年、二五七頁。
- ⑭ 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九八五年、五七七～五七八頁。
- ⑮ ⑭に同じ。
- ⑯ 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観 第一三卷 岐阜・静岡』同朋舎出版、一九八〇年、三二八頁。
- ⑰ 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観 第一四卷 京都』同朋舎出版、一九七七年。
- ⑱ 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観 第一九卷 岡山』同朋舎出版、一九七九年、二六〇頁。
- ⑲ 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観 第二三卷 福岡・佐賀・大分』同朋舎出版、一九八〇年、二二三頁。
- ⑳ 依田千百子・中西正樹編『金得順昔話集—中国朝鮮族民間故事集』三弥井書店、一九九四年、一〇〇～一二七頁。
- ㉑ 高橋亭訳『朝鮮の物語集』日韓書房、一九一〇年。
- ㉒ 関敬吾編『日本昔話集成 第4巻本格昔話三』角川書店、一九七八年、二四九頁。
- ㉓ 九月九日（旧暦）とは、「重陽」または「重光」とも言う。一般に「重陽」と「重光」とは「陽」が重なるという意味で、「重九」とは「九」が重なるという意味である。陰陽思想による「奇数」は「陽」の数を、「偶数」は陰の数と言い、「陽」の数を吉数であると考えられた。例えば伝統社会の節日として、「ソル」(一月一日)、「サンジンナル」(三月三日)、「端午」(五月五日)、「七夕」(七月七日)、「重九」(九月九日)などがある。
- ㉔ 三月三日（旧暦）とは、「三月サンジンナル」とも言う。漢字では、「上巳」、「元巳」、「重三」、「上除」、「踏青節」とも書く。「サンジンナル」とは「三」の「陽」が重なるという意味である。「サンジンナル」とは、春が訪れてきたことを知らせる「名日」という祝日である。この日は、江南という南の国から燕が戻ってくる日であり、冬眠から蛇が起

- きる日でもあると言われている。「サンジツナル」の由来は確かではないが、新羅時代（BC五七年～AD九三五年）以来様々な催しが行われ、朝鮮時代（一三九二年～一九一〇年）まで続いていたと伝わっている。また、蝶や他の鳥が現れるなど、昔、慶尚北道地方ではその日に蛇を見ると、運が良くなると信じていた。その他、この日には「豊年」を祈る「農耕祭」が行われたと伝わっている。
- ②5 金サンジン「興夫傳」発祥地の文献的考証―「興夫伝」の発祥地を探して（一）『古小説研究』創刊号、古小説学会、一九九五年。
- ②6 邊恩田「昔話「腰折れ雀」とパンソリ「興甫歌」―大工の家建てをめぐる」説話・伝承学会編『説話・伝承学』、一九九四年、三二〇頁。
- ②7 稲田和子編『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年、三三五頁。
- ②8 ②7に同じ、三二二頁。
- ②9 ②7に同じ、三二二頁。
- ③0 ③5に同じ、二九七頁。
- ③1 白田甚吾郎・崔仁鶴編「韓日昔話の比較―狗耕田譚と花咲翁を中心」『東アジア民族説話の比較研究』桜楓社、一九七八年、九十頁。
- ③2 関敬吾編『日本昔話集成 第二部の2』角川書店、一九七三年、四八七頁。
- ③3 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九七五年、一六四頁。
- ③4 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年、一〇一～一〇二頁。
- ③5 高木敏雄「増訂日本神話伝説の研究 2」東洋文庫、平凡社、一九七四年、二五一頁。
- ③6 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九八五年、五七七～五七八頁。
- ③7 崔仁鶴「韓日昔話の比較―狗耕田譚と花咲翁を中心に」『東アジア民族説話の比較研究』白田甚吾郎・崔仁鶴編、桜楓社、一九七八年、九一～九二頁。
- ③8 ③7に同じ。
- ③9 小澤俊夫「昔話にみられる隣モテイフ―日本」川田順造・徳丸吉彦編『口頭伝承の比較研究1』弘文堂、一九八四年、二四九～二五〇頁。
- ④0 稲田浩一「兄弟譚と隣の爺譚一考」京都女子大学国文学会編『女子大国文』第八三号、京都女子大学国文学会、一九七八年、十七頁。「兄弟譚と隣の爺譚」稲田浩一「昔話の時代」筑摩書房、一九八五年、二二二頁。
- ④1 ④0に同じ、二頁。
- ④2 ④0に同じ、二二頁。
- ④3 小峯和明『中世文学研究叢書10 宇治拾遺物語の表現時空』まんぼう社、一九九九年、二二七頁。
- ④4 ③9に同じ、二五〇頁。